

特集 家族の絆きずな



穏やかな海の中で、真っ白な子クジラに優しく寄り添う母クジラ。これは福井弘美さん(大平)が、自分の家族に照らして、家族の関係をキルトにしたものです。

弘美さんの長女・初美さんは、5歳から22年間、寝たきりの生活をしています。わずかに動く手で、初美さんはキャンバスに絵を描き、その絵を弘美さんがキルトにします。

こうして作られた作品は、見る人を温かい気持ちにし、顔をほころばせます。

近年、家族の虐待や薄れゆく家族の絆が叫ばれますが、目には見えない『家族の絆』とは何なのでしょう。

写真：福井弘美さん作『Mother』

※キルトとは、多色の布の表地と裏地の間に薄い綿を入れ、指し縫いしたもの。



絵を描く娘



キルトを縫う母

初美さん、
5歳で寝たきり生活に

弘美さんは結婚して5年後、生まれ育った大阪を離れ、夫・忠弘さんの地元である伊予市に移り住みました。

その頃、長女・初美さんが肺炎を繰り返し、夜中にたびたび呼吸が止まることに気づきます。何かがおかしい。検査の結果、脳に腫瘍が見つかりました。わずから歳からの寝たきり生活。弘美さんは相談する相手もなく、閉鎖的な状態でした。二人きりの病室で毎日を過ごし、時には初美さんにあたってしまいう日もありました。

「娘が自由にできない分、自分もしたらいかん、同じようにつらい状況の方が何か共有できるものがあるんじゃないかって、勘違いしてました。我慢するのが介護で、それが介護の美しい姿やと思って、なのにイライラして、余計に娘の負担になってたんです」。

「家族みんなで暮らしたい」
呼吸器付き小児在宅介護

初美さんの妹・順子さんが幼かったこともあり、いっどうなってもおかしくない状況何度か乗り越えてきた初美さんの命の強さを感じ信じて、弘美さんは在宅介護を決心しま

す。多くの人に「前例がない」と反対される中、「その前例は誰が作るのー」と、介護の仕方を1年かけて学びました。

「まだ5歳やのに毎日血を吐いて、代われるもんなら代わってやりたかった。どれほど痛いのか、自分の口や鼻にチューブを入れたこともありました。それでも、介護をする上で思いつかんことがたくさんあって、もつと早く気付いてあげたらよかったって、後から思います」。

家族みんなで一緒に暮らしたい。そのために一生懸命努力を重ね、主治医らの助けもあって、とうとう、脳腫瘍では全国初の、呼吸器付き小児在宅介護を始めました。

わずかに動く左手で

初美さんは愛媛大学で初めての訪問教育を受けられるようになり、その授業がきっかけで、元々右ききだったのを左手に変えて、絵を描き始めました。絵を描くことは、声を出せない初美さんの自己表現の一つになりました。

キルトで作った
誕生日ケーキ

入院中の6歳の誕生日、物が食べられない

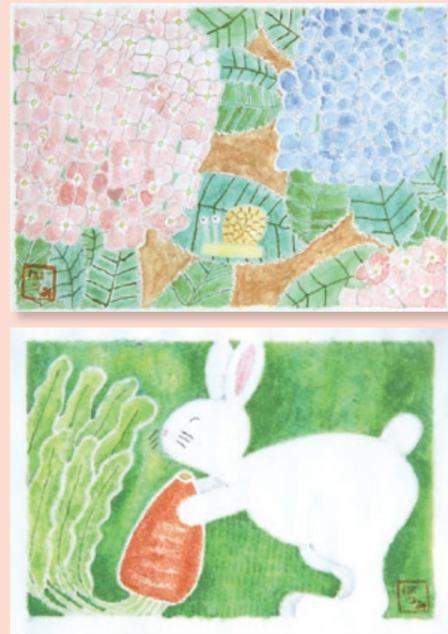
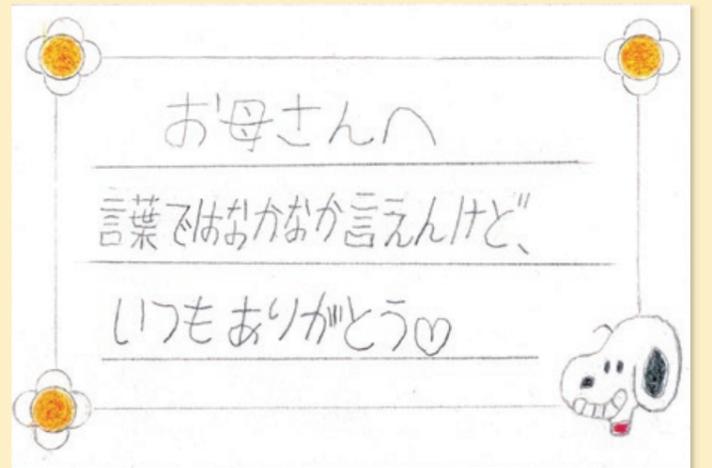
(次ページに続く)



母から娘へ

初美は沢山の絵を描いているけど、本当は描くことがとても苦手なんよね。
 奥はお母さんもパッチワークは苦手。
 お互い苦手なのに一生懸命取り組んで日々を送っているなんて、誰にも言えないね。だから完成した時はそれ以上に嬉しいね。
 それにしても沢山の作品が出来ました。
 お母さんと初美の時間がどんどん形になって残っていくね。いつの日からか、病気のことも忘れ辛いことも思い出になっていったね。
 お父さんも妹も助けてくれて家族も一つになりました。
 将来への不安は大きいけれど、家族みんなが一つ一つ乗り越えて行こう。先は永いし、私達の時間はゆっくり流れていると思うから。
 お母さんより

娘から母へ



初美さんのため、弘美さんはケーキをキルトで作って、プレゼントしました。これを機に、弘美さんは独学でキルトを作るようになりました。
 「細かい事は苦手で、でも苦手やからって何もせんかったら、暗くともでもない人生を送りそう。人に発信できることがしたかったんです。
 少しずつやけど、介護も家事もキルトも自分のしたいことをしてる、24時間全部が自分の時間だと思えるようになりました。」

母から娘へ、 娘から母への手紙

弘美さんの作品は、第10回キルト日本展や、全国手工芸コンクールで入賞。また、平成15年に開いた親子展から、弘美さんは、初美さんの描いたたくさんさんの絵を、キルトにするようになりました。昨年には、元気のなかった父・忠弘さんを励まそうと、自宅で小さな展示会を開き、家族全員参加の一大イベントとなりました。

絵を描いてキルトを縫って、毎日と一緒に過ごして、長い時間を過ごしてきた弘美さんと初美さん。けんかもたくさんして、悔し泣きした時もありました。なかなか言えないお互いへの気持ちを手紙にしました。それが上記の手紙です。

父、妹、祖母の支え

家族に「面白くて、めっちゃくちゃやさしい」と言われる父・忠弘さんは、「邪魔をしないことが僕の仕事」と言いながら、家族を一番に考え、守り、支えています。
 初美さんの妹・順子さんも、姉の介護をする母を思いやり、また強く前向きな姉を尊敬しています。順子さんが、娘の梨心ちゃんに愛情を持って接する姿を見て、母・弘美さんは「こんなやさしい子に育ったんや」と嬉しく思いました。
 一緒に暮らす祖母・栄さんも果樹園を営みながら、初美さんの介護にいそむ弘美さんと、お互いに支え合っています。

『一生懸命』と『思いやり』が 家族の絆を深める

それぞれの『一生懸命』が実になり、『思いやり』が伝わって、今の福井家があります。
 初美さんが一生懸命自分と戦っていることや、弘美さんが一生懸命初美さんのことを考えていること、そして家族が家族を大事にするという家族の思いやりが、福井家の絆を深め、みんなの笑顔につながっています。

今回『家族の絆』をテーマに、福井家を取材させて頂きました。一家族の歩んできた道のりは、書ききれないほどのエピソードや思いがたくさんあります。
 取材にあたり、福井家の皆さんには、家族について思うことをたくさん聞かせて頂きました。声が出せない初美さんは、口の動きを弘美さんが読み取って伝えてくれました。お互いへの手紙も、内緒で書いて頂きました。

普段から、家族に自分の気持ちを伝えることはなかなか難しいものです。それは、初美さんの手紙にあるように、「言葉ではなかなか言えない」気持ちだからかもしれません。

それぞれが一生懸命に生き、お互いを思いやるうちに、この言葉にできない気持ちや家族を結びつけていきます。この家族への尊敬と愛情の気持ちこそが、福井家だけでなく、どの家族の間にもある、『家族の絆』なのではないでしょうか。

22年間寝たきりで座ることもできなかった初美さんは、家族のサポートのおかげもあり、「私は立てる」と立つ練習をして、支えてもらいながらですが、本当に立てるようになりました。初美さんは絶対に弱音をはきません。

「好きな言葉は『何でもやってみるとわからん！何でもできる！』です。絶対に歩くことができる信じてリハビリを頑張っています。歩けるようになったらきっと自分のことが好きになります！」